

学会ハイライト

第10回世界毛髪研究会議

(平成29年10月31日～11月3日, 国立京都国際会館)

原田 和俊

東京医科大学皮膚科学教室 准教授

はじめに

2017年10月31日から11月3日まで, 小川秀興理事長(順天堂大学), 坪井良治教授(東京医科大学), 板見智教授(大阪大学)を会頭とし, 第10回世界毛髪研究会議(10th World Congress for Hair Research, 2017: 以下WCHR2017)が開催されました。乾重樹先生(心斎橋いぬい皮フ科)とともに本会議の事務局を務めさせていただいた東京医科大学の原田から学会の報告をいたします。

WCHR2017開催前の週末は, 季節外れの台風22号が本州を襲いましたが, 日本列島の南をかすめただけで過ぎ去り, 台風一過の秋晴れの中の開催となりました。

World Congress for Hair Research(WCHR)

WCHRは世界各地で活動する毛髪研究会が数年に一度, 1カ所に集合し, 合同で開催する国際会議です。毛髪科学研究会(SHSR: Society for Hair Science Research), NAHRS(North American Hair Research Society, 2年前からは南米を加えAHRSに発展的改名), EHRS(European Hair Research Society), AHWRS(Australasian Hair and Wool Research Society), KHRS(Korean Hair Research Society)から構成されるIFHRS(International Federation of Hair Research Society)がWCHRの開催年や開催場所を決定し, 担当となった研究会

のpresidentがWCHRの会頭を務めます。研究皮膚科学会におけるInternational Investigative Dermatologyのような位置づけです。日本の毛髪研究会であるSHSRは25年の歴史があり, 1993年に小川理事長を会頭として第1回の国際会議が開催され, 以後2001年にも小川理事長を会頭に第3回の大陸間毛髪研究会議が東京の椿山荘で開催されました。

今回のWCHR2017は日本臨床毛髪学会(JSCHR: Japan Society of Clinical Hair Restoration, 石井良典理事長)との共同開催でしたので, JSCHRの板見大会長とSHSRの代表世話人である坪井教授がco-presidentの役割を担いました。またJSCHRからも, 柳生邦良先生(紀尾井町クリニック), 佐藤明男先生(東京メモリアルクリニック平山), 倉田荘太郎先生(くらた医院)にプログラム委員として参加してもらい, 総勢20名の役員で準備を進めました(図1)。

Scientific program

WCHR2017の準備は2015年にマイアミで開催された第9回WCHR2015終了直後から始まりました。一番むずかしいのは資金集めですが, 今回からJSCHRと共同開催としたことで前向きに対処することができました。また小川理事長と坪井教授が中心となって日本製薬団体連合会や製薬会社から協賛を得ることができました。さらに

International Society of Hair Restoration Surgery (ISHRS)からも寄附をいただきました。学会準備における最重要事項であるプログラムは、杏林大学の大山学教授、浜松医科大学の伊藤泰介准教授を中心としたプログラム委員会により作成されました(図1)。また、学会プログラムの作成にあたっては、すべての参加者に楽しんでもらえるように臨床、基礎研究、植毛の関連演題が同時進行するように配慮しました。一般演題は査読による点数制でPlenary演題、講演演題を採択しましたが、招請講演の演者の選定については、地域ごとのバランスをとりつつ、若手の実力派を選ぶよう心がけました。

プログラムは、特別講演であるKeynote Lectureと、Plenary Session, Concurrent Session, 初学者やレジデントを対象としたLearning Course, さらに協賛メーカーによるSponsored Seminarから構成されました。世界39カ国から多数の演題登録があり、総演題数は380となりました。

Keynote Lectureは毛包のstem cellと毛包の再生に関する講演で、カナダのCalgary大学のJeff Biernaskie博士による毛乳頭のstem cellに関する演題と、東京医科歯科大学の西村栄美教授による毛包角化細胞と色素細胞のstem cellに関する演題でした。両講演ともマウスgeneticsを駆使した最先端の内容でしたが、基礎研究者だけでなく臨床医も真剣に聴き入っていました。また、韓国のOh Sang Kwon教授による毛包再生の講演は化学療法に起因する永久脱毛の治療を視野に入れた内容でした。

Plenary Sessionは毛髪研究、臨床の各分野から選ばれ、non-coding dsRNAと毛包再生、電顕像を再構成した毛包のdermal sheathの形態観察、瘢痕脱毛の臨床病理学的研究、JAK inhibitorの円形脱毛症に対する効果など、どれも素晴らしい内容の講演でした。

Concurrent Sessionは各プログラム委員(図1)が1分野を担当して組み立て、基調講演および招待者による講演、さらに査読で高得点を獲得した演題が口頭発表されました。すべてのセッション



図1 WCHR2017 組織委員会。

10th WCHR

Honorary-President: Hideoki Ogawa
Co-President: Ryoji Tsuboi
Co-President: Satoshi Itami
Congress Secretary:
Shigeki Inui
Kazutoshi Harada
Scientific Program Committee:
Chair: Manabu Ohyama
Vice-Chair: Taisuke Ito
Yasuyuki Amoh
Jiro Kishimoto
Sotaro Kurata
Takashi Matsuzaki
Motonobu Nakamura
Emi Nishimura
Norimitsu Saito
Akio Sato
Yutaka Shimomura
Kohei Toyoshima
Rie Ueki
Kuniyoshi Yagyu
Kotaro Yoshimura

を紹介することはできませんので、代表的なものを取り上げます。円形脱毛症のセッションでは、Dr. M. Bertolini (University of Münster, German) の病変部に浸潤するCD8陽性T細胞受容体の解析やDr. EHC. Wang (Columbia University, USA) のC3H/HeJマウスに効率的に脱毛症状を誘導する方法などが注目されました。瘢痕性脱毛のセッションでは、Dr. AG. Messenger (Sheffield, UK) によるfrontal fibrosing alopeciaの増加原因としてサンスクリーン剤の使用の可能性があるとの報告がありました。ダーモスコピーのセッションでは、それぞれの講演者がこれまでに蓄積された知見をわかりやすく解説し、明日からの診療に役立つ知識を得ることができました。

植毛のセッションでは、欧米の著名な医師が総括的、基礎的な内容から新しい研究手法や診断法、植毛術成績などの講演を行いました。臨床に役立つ実践的な内容の講演が続き、熱心な質疑議論が行われました。

Learning Courseは学会初日の午後でしたが、予想以上に聴衆が多く、メイン会場の座席の大半は埋まっていました。講演内容も毛髪の解剖、生理から脱毛疾患の解説まで、毛髪に関する幅広い分野をカバーしていました。

Sponsored Seminarは当初企業が集まらないのではないかと危惧されましたが、坪井・板見両会



図2 開会式.

頭とJSCHR委員の尽力で、多数の企業から支援が得られ、弁当付きのセミナーが開催されました。通常このようなセミナーは、主催したメーカーの製品を学術的に味付けして宣伝するという講演が多いですが、WCHRのSponsored Seminarは非常にレベルが高く学術的なセッションでした。また企業展示も各国から多彩な出展をいただきました。

Social events

オープニングセレモニーは小川名誉会頭の開会宣言で始まりました(図2)。今回は区切りの第10回大会であることと、学会テーマを“Visiting old,

find new”(図1)としたことから、オープニングセレモニーで世界各地の毛髪研究会のpresidentが歴史や活動内容を紹介しました。日本からはSHRSの紹介を坪井教授、JSCHRの紹介を板見教授が行いました。この企画は各国の研究会活動を知ることができ、たいへん好評でした。その後に各societyのpresidentに、WCHRへの貢献に対して小川名誉会頭からメダルが授与されました。

オープニングセレモニーでは特別講演として『黒髪の文化史』の著者である大原梨恵子先生のお話がありました(図3)。内容は中世から近代の日本人の毛髪に対する位置づけについてでした。講



図3 特別講演.



図4 Gala Dinner.



図5 閉会式.

演はご自身が描かれた美しいイラストを示しながらの興味深いものでした。

Gala Dinnerは、会場の隣にある宝ヶ池プリンスホテルで開催されました。海外からの参加者はドレスアップして参加し、夫婦・家族同伴の方も多かったようです。会は坪井・板見両会頭の挨拶で始まり、各societyのpresidentのスピーチがありました。さらにステージで芸妓の踊りが披露され、勝岡憲生北里大学名誉教授による乾杯の発声のあと懇親会となりました。旧交を温める参加者、新しい共同研究の相談をする参加者などで会は盛り上がりました。懇親会のもう一つの余興は阿波踊りでした。本場徳島から荒瀬誠治徳島大学名誉教授が参加され、踊りの説明の後に阿波踊りが披露されました。踊りの輪の中へ懇親会の参加者も加わり、会場内を練り歩きました(図4)。

Faculty Dinnerは板見教授ご推薦の京都東山のThe Sodoh東山で開催されました。レストランの建物は昭和初期に建てられた日本画家・竹内栖鳳の旧私邸で、庭園も美しく、法観寺八坂の塔を一望できる素晴らしいロケーションでした。また、料理はイタリアンを京風にアレンジしたもので、海外からの参加者には、京都の雅な景観と美味し

い料理の両方を楽しんでいただけたと思います。

クロージングセレモニーは、坪井・板見両会頭の挨拶の後、次回第11回WCHRの会頭であるRamon Grimalt教授が学会のプレゼンテーションを行い、参加者で記念撮影を行って(図5)、バルセロナでの再会を約束して散会となりました。

おわりに

学会参加者は709名とこれまで開催されたWCHRの中でもっとも参加人数が多い大会となりました。参加者数が予想をはるかに超えていたため、コンgresバッグや弁当、食事、コーヒーなどが足りないという問題は発生しましたが、うれしい悲鳴となりました。また、日本からの参加者は177名で、参加者の内訳からみてもまさに“World Congress”でした。海外でも有名な観光地である京都で開催され、好天にも恵まれたため、参加者の多くは市内観光に出かけてしまうのではないかと危惧されました。しかし、4日間を通して、どの会場もほぼ満席で、WCHR2017は参加者の毛髪研究に対する熱意が伝わってくる素晴らしい国際会議でした。